

刊行によせて

2016年度の『年報』が完成しましたのでお届けいたします。

現在、神奈川大学日本常民文化研究所では、研究所本体と国際常民文化研究機構の二つの機関が連携をとりながら事業を推進しています。常民研の付置研究機関である非文字資料研究センターについては、非文字資料に特化した研究活動を行い、独自に『非文学資料研究』（旧：年報）を刊行していますので、本研究所の『年報』には、研究所本体と国際常民文化研究機構の活動の内容を掲載することになります。ただ、非文字資料研究センターの刊行物については、紹介欄を設けてお知らせしています。

そこで、本巻に収められた二つの機関の主な活動内容と成果を紹介することにいたします。本書は、第Ⅰ部 常民文化研究講座・研究会開催報告、第Ⅱ部 調査・研究活動報告、第Ⅲ部 活動記録の三部構成となっており、それぞれ特徴的な活動報告が盛り込まれています。まず、第Ⅰ部では、研究所本体の第20回常民文化研究講座・国際研究フォーラム「揺れる沖縄—戦争から占領、そしてシマクトゥバからオキナワン・ロックまで—」が特筆されます。また、本研究所と横浜市歴史博物館との主催で行われた展覧会「和船と海運」も成功裏に終わり、関連して『和船と海運—江戸時代横浜の船路と和船のしくみ—』が刊行されたことも大きな成果といえます。神奈川大学会場「順風満帆 千石船—和船の構造の技術—」と横浜市歴史博物館会場「津々浦々 百千舟—江戸時代横浜の海運—」のどちらも多くの来館者を数え、アンケート調査の結果でも高い評価を得ています。

第Ⅱ部については、現在進行している研究所本体の共同研究「海域・海村の景観史に関する総合的研究」をはじめとする六つの共同研究や、「三宅村郷土資料公開・保存事業」など二つの受託研究の内容が紹介されています。受託研究「三宅村郷土資料公開・保存事業」は、2016年度より正式に受託研究となったものです。この第Ⅱ部での国際常民文化研究機構の主な事業としては、公募による四つの共同研究（一般・奨励）が挙げられます。共同研究（一般）では、昆班の「東アジアの伝統的木造船建造および操船技術の比較研究」（最終3年目）と、加藤班の「戦前の渋沢水産史研究室の活動に関する調査研究」（2年目）の二共同研究が推進されています。他方、在野の研究者を対象にした共同研究（奨励）では、小林班（最終2年目）、千葉班（1年目）の二共同研究が行われていますが、そのうち、千葉班の「宮城県気仙沼大島における遠洋漁業の歴史の変遷に関する研究—震災救出資料を中心として—」は、常民研と大学院歴史民俗資料学研究科が共同で取り組んだ東日本大震災による被災資料の救出活動を契機に始まった研究として注目されます。昨2015年度に研究期間を終えた共同研究（奨励）の高江州班の成果報告も、「共同研究フォーラム」の形で発表されています。

最後に、今後とも内容ある『年報』の編集に力を注ぎたいと思いますので、『年報』を通して研究所の活動をより一層ご理解いただきますようお願い申し上げます。

2017年12月15日

神奈川大学日本常民文化研究所所長
国際常民文化研究機構運営委員長

田上 繁

